

---

# ゴキブリ少女

水守中也

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゴキブリ少女

### 【Nコード】

N5774H

### 【作者名】

水守中也

### 【あらすじ】

高校の入学式。友達いない歴15年の黒羽ひかりのもとに、一人の少女が歩み寄り声をかける。ひかりの苦難の日々の始まりです。

前世ではお姫様？（前書き）

タイトルの「G」はまだ登場しません。苦手な方も安心してくださ  
い。

## 前世ではお姫様？

県立佐ノ丘高校の一年五組の教室には、入学式を直前に控えた新入生が、不気味なほど大人しく座っていた。

この雰囲気があたしは好きだった。みんなが無口な人間であるひととき。あたしと同類であるとき、このときだけはクラスに溶け込んでいられる。でもそれはひととき。静かと言われていたクラスも、すぐに騒がしくなるものなのだ。

目立たない範囲で、教室をきよろきよろと見回しながら物思いにふけていた。

あたしの名前は黒羽ひかり。ぴっかぴかの高校一年生だ。でも、ぴっかぴかかって言葉が似合うほど綺麗じゃない。肌は黒い方、背は小さくて丸っこい。髪はくせっ毛で、前髪が跳ねているし、じめじめした性格で暗いし……って、こう考えている自体がそうなんだけど。

（はあ。運命の出会いでもないかなあ？）

そう。素敵な男の子が声を掛けてきて、意気投合。よくおしゃべりする友達になる。彼と話しているうちに、あたしの自分でも知らなかった隠された一面が引き出されたりして……そして二人は恋に落ちる。なんて展開。

「ああっ。ついに見つけました。運命の人っ！」

「えっ？」

いつの間にか、あたしの前に立っていた人がそんな風に声を掛けてきた。

もしマンガやアニメだったら、こんな台詞を言う人は、格好良くって綺麗で、絶対金髪の男（ト）。なんだけど、今のは女の声だったような気が……

自然とうつむいていた頭を上げて、前に立っている人物を見る。顔を見るまでもなく、途中の制服で分かってしまった。やっぱり女

の子です。はあ……

「やはり……こんな所で再会できるなんて。嗚呼、何と言う運命……」

「あのお〜」

あたしは躊躇しつつも、彼女に声を掛けた。

「ここにいるんだからおそらく同級生だろう。身長はあたしよりはあるけど、それほど大きくない。背中まで伸びる黒い髪が綺麗。顔は……ちよつとイッチャってているから、素は良く分かんないけど、たぶんすごく可愛い、と思う。」

その可愛い女の子はあたしの言葉をきっぱり無視。

「ああ、私はこの日をどれだけ待ち望んでいましたことが……」

「あのお、こんなあたしを運命の人なんて言ってくれるのは嬉しいんだけど……あたしはノーマルだから、その、女の子はちよつと……」

彼女の身体全体（全身の言うより何かしっくりくる）がぴくりと止まり、真顔に戻る。

「やですわ 私はそう言う意味で言ったわけではありません。同性愛者としての対象ではありませんよ」

「そうですねえ。あははは」

「おほほほ。だってあなたと私は、前世での知己な間柄ですもの」

「あは……」

「つて、今何か、凄い単語が聞こえたような……」

「あの、いつからの間柄って言いました？」

「はい 前世からの、です」

一点の躊躇もなく、曇りのない笑顔で彼女はそうのたまった。

「前世ええええっ？」

思わず立ち上がって叫んじゃった。

「では、最後にこの言葉を新入生に送ります」

体育館の会場で、生徒会長さんがメモを逐一見ながら何か言って

いる。

あたしはそれを聞き流しながらボーッと用意されたパイプ椅子に座っていた。

叫んだ後、一斉に教室のみんなの視線を浴びたけど、すぐに担任（だと思っ）の先生が教室に入ってきて、そのまま入学式に出席するため、体育館に移動となった。おかげで、変な注目を浴びることは避けられたけど。

前世ってなによおお？

前世、それは、あたしが生まれる前になっていたもの。いかにも少女漫画の世界だ。前世で愛を引き裂かれた二人が、来世に再会を誓って、一緒に……

でも彼女は普通の人だって言っていたし、雰囲気からして女の子ぽい。ということば

あたしの前世って、男の人だったのっ！

でも前世だから別にいいや。

そもそも、恋人と言う前提だからいけないのよ。知己って、知り合いつてことですよ。ただの友達かもしれないし。あ、でも前世って言うぐらいだから、きつと凄い世界だよな。バリバリのファンタジー世界。もしかして、あたしはお姫様だったかも。少なくとも、ごく普通の女子高生だったわけじゃないよね。うん。ちょっとわくわく。

よし、式が終わったら、彼女に詳しく聞いてみよう。

入学式が終わって、あたしを含めた生徒たちが、そろそろと廊下を通って教室へ戻って行く。その途中、あたしが聞きに行く前に、例の彼女が列を崩してこっちにやって来た。

「また、お会いできましたね。ああ、運命を感じます」

「……そりゃ、同じクラスだし、そっちから会いに来てくれれば……」

「自己紹介がまだでしたね。私は、姫宮綾乃です」

「あ、あたしは黒羽ひかりです」

どうしても、人と話すとき「です・ます調」になっちゃう。やな性格だ。向こうも同じだけど、あれは何となく地の様な気がする。

「あの、前世って話だけど……?」

恐る恐る聞いてみる。これで「冗談です」と笑われたら、さつきまで色々考えていた自分が馬鹿みたい。だけど彼女はあたしの心配をよそに、真顔で肯定した。

「はい。本当のことですよ」

「それって、もしかしてお姫さまだったりとかして?」

「はい。私が姫でした。ああ、素晴らしいことです。記憶が戻り始めたのですね」

……いや。記憶はさっぱり戻っていないんだけど……

「じゃあ、あたしは?」

「もちろん、私の家来です」

「へっ?」

「家来です。言い替えると、家臣もしくは下僕、百歩譲って、メイドです」

「……………」

よりによって、何ゆえ家来? 前世ぐらい、良い体験したいのにいい。

前世に対するイメージが崩れてゆく中、彼女は大きく両手を広げて、尊大にのたまった。

「さあ、仕えるのです!」

## 募集しちゃいます

「うーん……」

パターンっ。

帰宅するなり、あたしは自室のベッドの上に倒れこんだ。あの戦慄の入学式から二日。これがすっかり日課となってしまうた。

姫宮さんの話によると、彼女の前世は異世界のお姫様だった。でもって自分は、その彼女に使える家来その一。ちなみに女性だったらしい。前世の姫宮さんはお姫様だけあって敵に狙われる立場でもあった。以上。

この他にも、どここの国のお姫さまだとか、敵やあたしの名前が何々だか言っていたような気がするけど、馬耳東風していたあたしの頭の中には入っていない。もちろん、今のあたしに、前世のそんな記憶はない。

入学式から二日。学校でほとんどの時間、仕官の勧誘(?)を受けている。

朝学校に行つて下駄箱を見ると、便箋が。もしやこれがあの噂に聞くラブレターかと思えば、姫宮さんの「仕官の勧め」。休み時間、「手相を見て差し上げましょう」と姫宮さんに言われて、手を差し出したら、「私に仕える運命が出ていますね」。トイレに入っていると、姫宮さんが個室の上から顔を出して、「今仕官すると、洩れなくトイレットペーパー一個プレゼント」。そんな心労に耐えられず、あたしが机に突っ伏して居眠りしていると、「あなたはだんだん仕えたくなくなる」と、姫宮さんが耳元で催眠術、などなど。それにいちいちつつこみを入れたり、反応しているうちに、あたしはすっかり、クラスの中で変な人という立場になってしまった。言うまでもないけれど、姫宮さんも同様だ。

けれど実は、少し嬉しかったりもする。

暗くて大人しい人だった中学時代は友達もいなかった。そんなあ

たしを氣遣って、色々話し掛けてくれる人はいたけど、それは腫れ物に触るような態度で、それがかえって、友達いないことを強調されているみたいで嫌だった。

でも変な人になってしまった今は、変な目で見られることもあるけど、話し掛けてくる人はいて、その態度は不思議と好意的だ。もともと一人で突拍子もないことを妄想して浸っている人間だったので、「変な人」の資質はあったのかもしれない（それについては微妙）。

まあそんなわけで、姫宮さんにちょっとだけ、感謝している（でも土官は嫌）。

「だって、前世では主従関係があったかもしれないけど、今は現世だもん。そんな義理なんてないよね」

けれど気になることもある。あたしは姫宮さんの家来兼護衛だったらしいのだ。そして、高貴な血を引く姫宮さんは色んな敵に狙われている。そのため、あたしに守ってもらいたいみたいなのだ。

でも今のあたしには、彼女の命を狙うような輩と戦う力なんてない。走るのにちょっとだけ自信があるくらい。それだけじゃ守ることなんてできやしない。

だからと言って、あたしが姫宮さんから逃げまわっているうちに、もし彼女がその敵とやらに殺されたりしたら？ でも……

「はあ……」

考えているうちに気分が重くなる。いつもの悪い癖。こんなときは気分転換が一番っ。

あたしはかばんを開けて、真新しい高校の教科書にでも目を通すことにした。教科書を取り出すと、かばんの中に身の覚えのない便箋が入っていることに気付いた。

……またですか。

今朝、下駄箱に入っていたのと同じ物。つまり姫宮さんの仕業と言うことだ。

捨てちゃおうかな、って思ったけど、取り出して一応中を確かめ

る。予想通り、一枚の紙が入っていた。

横書きに「見てね」と違和感ばりばりの可愛い文字で書かれていて、その下に、なにやら横文字が。

「これって……URL、だよな」

ネットのアドレスだ。姫宮さんのブログかホームページかしら。メル友いなりやチャットもしないけど、一応両親のお古のパソコンが、自分のものとして部屋に置いてある。久しぶりに立ち上げて、アドレスバーに、そのURLを打ち込んでみる。

いきなり画面が暗くなって、

「って、なによっ、これは！」

あたしは思わず一人で叫んでしまった。

やたら広告が多いそのサイト。その全てが何やら卑猥。【巨乳大好き】とか【小生ひかり一歳の××が】とか。けばけばしくて、やたら女性の裸が目立つ。

これぞ噂に聞くエロサイトに違いない（そう言えばアドレスに「ero」なんて書かれてもいた）。十八歳未満お断りの世界。って、あたしは十五歳よっ。

「……………姫宮さんって……………」

怒るのを通り越して、呆れてしまった。何を考えているのだろう。もしかして、おちよくられてる？

「けどまあ……………せっかくだし……………」

あたしはちよつとドキドキしながら、少しだけそのサイトを覗いて見ることにした。男の子と話したことなんて、ここ一生のうち数えるほどしかないけど、あたしだって健全な女の子。ちよつとぐらいは興味があるもん。

「えっと……………貴女の欲望をかなえます……………？」

掲示板みたい。あたしはパソコンのキーを下に入れて画面を動かして……………見なければよかったと、心から後悔した。

めっちゃくちゃにしてください

投稿者：姫宮綾乃

投稿日：

4月9日 23時40分12秒

今春、入学したばかりの女子校生一歳です。昔の知り合いが、私のことを無視して、近頃寂しいのです。だからヤケになって、私のバージンを差し上げたいと思います。明日の夜十時、×××で待っています……

「だあああ！」

思わず叫んでしまった。目の前にある物がデリケートなパソコンじゃなかったら、迷わずパンチを入れていただろう。

昔の知り合いって、あたしのこと？ 確かに無視したりもしたけど、それだけで何で、よりによって……その……あれなのよおッ！ しかもこんなふうにかかれたら、まるで、あたしが悪いみたいじゃないっ！

日付けは昨日。明日の夜十時とは、つまり今夜のこと。場所は、家から自転車で行って五分も掛からないところ。近所だ。

URLのメモを渡し、しかも場所をあたしの家の近所に指定した（どうしてうちの住所を知っているのか分からないけど）と言うことは、あたしに助けに行けということだろう。でも、敵が違うでしょおっ。しかも募集してるしいっ！

「……どうしょ？」

馬鹿なことするな、と掲示板に書き込むことはできるけど、見てくれるとは限らない。電話番号・メールアドレスは分からない。もちろん彼女の家もどこにあるのか知らない。

「……仕方ないか」

あたしは大きいため息をついて、パソコンを終了させた。制服を脱いで、動きやすい服装に着替えた。

初めての・・・

風が冷たい。そりゃ四月の初めだもんねえ。

「何でこんなことをやってるんだろ……」

午後九時半。あたしは家の外にいた。なぜ夜中にうら若き少女が外出しているかと言うと、それは例の場所へ行くからです。日の明るうちに目的の場所に行つて、姫宮さんがやって来るのを待つて方法もあつたけど、ずっと一人で待つているのも馬鹿馬鹿しいので、時間に合わせて行くことにした。

両親もこんな時間によく娘の外出を許してくれたものだけど、「ちよつと友達の家に行つてくるね。もしかしたら泊つてくかもしれないから」と言っただけで、あつさりオツケーをもらった。両親が楽天家でよかつたと思う。もしかしたら、友達の家泊りに行くという、普通の女子高生しているあたしを、喜んでいたのかもしれない。

自転車に乗つて、暗い夜道を走る。ときおり見せる街灯や家の明かりは、闇を微かに照らすけど、それがかえつて、物寂しさを醸し出す。闇は昼間の騒音を飲みこみ、肌に当る風が、あたしを感傷的な気分にいざなう。

そんな幻想的な世界を、あたしは自転車で一人ゆく。友を助けるために……

ああ、なんかあたしつたら、漫画の主人公みたい。つて、友じゃないつーの。

つっこみを入れる。

徐々に現実に戻されてゆくにしたがつて、不安な気持ち膨らみ始める。

仮に、「アレ」の最中で、欲望が煮え滾つた男の中に、あたしのような美少女（じゃないけど実際は）が顔を出したら……焼け石に水どころか、火に油。

それとも、すべてが終わった後にあたしが到着した場合。なんか白い液体をくっ付けて着衣が乱れている感じの姫宮さんに、「お待ちしていました」って、にっこり微笑まれたりしたら……

怖すぎるううう！　なんか絶対に夢に出てくるぞっ！

……まあ。何も起こってなく、ただ姫宮さんがいるだけって可能性もあるしね。

ありえそうなのは、誰もいないことだ。むなしいけど、それが一番無難かもしれない。

周りから民家がなくなった。まさに痴漢注意な場所だ。

大きな雑木林の中に、小さな道が通っている。昼間は、抜け道として使用されていて、自動車もわんさか通るけど、今の時間は本来の道も空いているため、おんぼる街灯が微かに照らすだけの暗い小道を、車が通ることはない。

「指定した場所って、たぶんこのことだと思うんだけど……」

あたしは自転車から降りて転がす。スピードが落ちたため光は弱まった。けれど、目が慣れたおかげか、うっすらと周りを見ることが出来る。

いた。自動車と自動車がすれ違うときに利用する道路脇の小さなスペース。そこに姫宮さんが一人、立っていた。闇に目立つ白のワンピースに、カーディガン。寒そうな服装だけど、暗闇に浮かぶ彼女の姿は不思議なほど綺麗だった。

……白っぽいので幽霊にも見えるけど。

「お待ちしていました」

姫宮さんがつこりして言う。白い液体が付着していたり、服のどこかが破けていたりとかはない。良かった良かった。それを確認すると同時に、ほっとして気が抜けてしまった。

「……まったく、無茶するんだから……」

あたしは自転車に、崩れるように寄りかかった。

「きつと来てくれると信じていました。さすがは家臣、忠義の者です」

さも当然のように言う彼女だが、その表情はどことなく嬉しそうだった。その顔を見て、あたしもなんか嬉しくなっちゃう。

って、あたしったら、なに家来の喜びを見出しているのよっ。

「で結局、これは何だったわけ？ ただあたしが来るかどうか試しただけ？」

「はい。そのままです」

「それだけのために、その、あれを募集したの……？」

「はい。とは言っても、あんなのを真に受ける馬鹿はいません。だから安心なのですよ」

「どうせ、あたしは馬鹿です」

ほんと、真に受けて慌ててここまで来たのが、馬鹿みたい。けれどももしあたしが冗談だろうと、ここに来なかつたら姫宮さんはどうしていたんだろう。ずっとここで待っていたの？ こんな真っ暗で寒い所に一人つきりで……まさか、ね。いくらなんでもそこまで……

「どうです？ 主従関係もはつきりして用事も済んだことですし、これから私の家にも参りませんか。すぐ近くですよ。明日は休みですし、泊っていつでも構いませんよ」

姫宮さんの言葉があたしを現実に戻す。

主従関係って……そ、それはともかく

これは、もしかして初・友達（だから違っつて）の家にお泊まりい？

急なお誘いに、あたしは躊躇した。

なんか裏があるかもしれない。けど断わる理由もない。急に押しかけて相手の家に迷惑がかかるかもしれない。けれ誘われて少し、いや大分嬉しかったりして……

「ま、まあ。これだけのことをやらかしたんだから、それ相応の対応はしてもらわないとね。鎌倉時代だつてご恩と奉公でしょ。褒美は貰わなくちゃ」

両親にお泊りになるって言っちゃったし、と内心言い訳しつつ、ちよつと恩着せがましく言っちゃった。

「はい。では、参りましょうか」

あたしの葛藤なんてどこ吹く風。彼女はいつもの笑顔で答えた。気のせいかな、ほっとしたようにも見えたけれど、ようやく帰れるとも思っているんだろう。寒いし。

道の奥から車がやってきた。ハイライトの上、目が暗闇になれてしまったため、ものすごく眩しい。車種は分からないけど（って言うか、車のことよく知らない）軽のワゴンだ。

「お迎え？」

さすが、前世お姫様

けど、そのお姫様は首も振らずに否定した。

「いいえ」

ワゴンはあたしたちの目の前で停車した。中から若い男が四人出てきた。ガラは悪い。

それを眺めながら、姫宮さんがぼつりと言った。

「たぶん、先ほど言った馬鹿かと」

「だあああああ！」

今までのうつぶんを吐き出すかのように、大声で叫んでしまった。

## その名は

若い男が四人。一人が街を歩いたら目立つたろうけど、複数でいると区別がつかない、そんな格好をした四人だ。

いきなり叫んだあたしに、少し驚いたみたいだけど、今はそんな様子も見せず、徐々に近づいてくる。彼らが、ただ何となく車から降りたわけでも、あたしたちに道を尋ねるつもりで降りたわけでもないのは、つぎの台詞で明らかになった。

「おいおい。マジでいたぜ」

「どっちだ？ 例の掲示板のやつは」

「別に二人一緒でかまわねえだろ。とっととやってしまおうぜ。誰か来たらやばいって」

「だったら、車に積みこんじゃえばいいじゃん」

物騒な会話が耳に飛び込んでくる。お得意の馬耳東風もできない（できたって、何の解決にもならないけど）。

「やはり、私は敵に狙われる運命の星の下にあるんですね。さあチヤンスです。部下としての株を上げましょう」

「……その敵を呼んだのは、あんたでしょ……っ！」

小声で怒鳴ってやる。とにかく逃げようと自転車の方に目をやると、すでに男の一人が、あたしの自転車に寄りかかっていた。すぐ近くに家があると言っていた姫宮さんの自転車は見当たらない。残りの三人が前方と、右左に広がって逃げ道をふさぐ。後ろは林。こんなに真っ暗では走るのもとより、歩くのも不可能。

つまりこれって、貞操の危機っ？

まじっすか、これ。

男の一人が、厭らしい笑いを浮かべながら近づいてくる。いつの間にか姫宮さんはあたしの後ろに陣取っている。あたしに庇われるような形、お姫様ポジションだ。

ど……どっしよ……？

足が震えてきた。あたしは不細工だから、こんなことに遭うなんて、思ってもいなかったのに……

「目覚めるのですっ。ひかりさん！」

脈絡もなく、背後で姫宮さんが凜とした声で叫んだ。その声を聞いた瞬間、あたしは頭に鈍い痛みを感じる

「……って、何よこれはっ！」

あたしは振り向いて、姫宮さんの腕を掴んだ。彼女の手握られていた物……それはハリセンだったりする。

「いや……このように致しましたら、記憶も戻るのではないかと思いまして」

「いつの時代のテレビの話よっ！」

思いつきり顔を近づけて怒鳴る。世間知らずのお姫様に世の中というものを教えてやる。あたしの跳ねた前髪が、彼女の頭にあたってひよこひよこ揺れる。

「……こいつら、大道芸人か？」

背後で呆れた声。うつつ……これから酷いことされるのに、酷い勘違いまで。

「ま、別に構わねーけど」

男の手があたしの肩に触れた　いやっ！

あたしはとにかく必死に振り払って……気付いたらかなり離れた所に立っていた。

あれ？

まるで瞬間移動したみたい　確かに必死に逃げたけど　男の

方も同じみたいで、ぽかんとしている。

「ぎゃはは。何やってんだよ」

「……このっ！」

仲間の一人に笑われて、さらに腹が立ったのが、本気でこっちに突進してくる。

今度は駄目だっ。と思っただのに、まだ衝撃が来ない。思わず閉じた瞳を開けてみると、男がスローモーションで向ってきている（進

行形)。あたしは？マークを浮かべながら、姫宮さん他を見る。彼女たちは目の前の男ほど顕著に動いていないけど、やっぱり同じように動きが遅い。

「……ふえ？」

遅いと言っても、ぴょん……ぴょん……ぐらいのスピードだ。このままでは捕まってしまう。あたしは横に避ける。男はそのまま通りすぎる。なんか間抜けだったので（カエルみたい）、軽い気持ちで、男の背中に回ってドンと押す。勢いが付いていたのか、男はそのまま前のめりに倒れた。

呆気にとられるつつ、ほっとした瞬間、世界が元に戻った。

ざわめきが起こる。残りの三人からだ。姫宮さんだけは不敵に笑っている。まるで全てお見通しだ、と言うかのように。

「そっか……」

それを見て、あたしは全てを悟った。

ゆっくりと彼女の前に向う。そして言った。

「これはドッキリねっ！」

「……は？」

姫宮さんが目を点にする。初めて見た表情だ。ふん、そんな面白い顔したって騙されないわよ。

「つまり全てやらせだったのよ。あの掲示板は、実はあなたがそっくりに作成したホームページだった。……もちろん、この人たちはあなたに雇われたさくら。わざとあたしに負けさせて、強引に家来兼護衛にしちやおうという魂胆でしょっ！」

ホームズ並の素晴らしい推理（読んだことないけど）。どうだね。ワトソンくん？

けれど、姫宮さんは瞳の大きさを元に戻して、ゆっくりと言った。「いいえ。これが前世における、あなたの力……後ろ」

振り帰ると、さつきとは別の男が襲いかかってきていた！

そっちに意識を向けた瞬間、世界が変わる。スローモーションの世界。テレビのバラエティのスローVTRで聞く、あの、もわあと

した変な声は聞こえない。さっきまでうるさいほど耳に入っていた、風によって木々が擦れる音も聞こえない。静寂の世界。

あたしはひよいつと横にどく。

世界が元に戻り、それだけで、男は勢い余って林に突っ込んだ。

「これって……」

あたしはもう一度姫宮さんを見た。

何となく仕組みを理解したような気がする。

「ひかりさんは自覚していなくても、私たちから見るとあなたは物凄いスピードで動いています。これがあなたの力です」

「よおし……っ」

あたしはきらーんと瞳を輝かせて男たちをにらみつけた。一步引く残りの二人。

弱肉強食のこの世の中。弱き者は、焼肉定食になる運命なのよってさすがにそこまではしないけど　今までの恐怖、倍にして返してやるっ！

後はあたしの独壇場！　グーで相手の頭を殴ると、こっちの手が痛いことを発見したので、スピードを生かして、脇の林で掌サイズの石を拾う。その石で、相手の固いところ　肘とか膝とか　を殴った。さすがに頭にはしません。それだけで効果覿面っ。その箇所を抑えてうめく男たち。這うようにして車に戻り、いったん林に突っ込みかけて、去って行く。月並みな「覚えていろよ」が聞けずじまいなのが、ちよっと残念。

けど。

き、気持ち良いいい〜

あたしは思わず歓喜の涙。ありがとう、前世のあたし。幸せな世の中にばんざーい。

「お見事。さすがです」

姫宮さんが言う。その声に喜びが含まれているのか、自分の気分が良いから良く聞こえるのか。とてもいい感じだ。

あたしはくるりと振り帰って、満面の笑みを浮かべる。

「あたしの前世って、武闘家だったのねっ」

そう、華麗なる美少女武闘家。その立ち振る舞いは、余人、それに敵までをも魅了する、まさに、舞踏と呼ぶに相応しい……武術を芸術の域に達した者だけに許される称号

「いいえ。違います」

うつとりとその姿を想像する。

「ゴキブリです」

そう、その名はゴキブリ……

「えっ？」

何か変な単語が聞こえたような気がしたけど。まさか、ね。あたしは笑顔で聞き返す。

「ゴキブリです」

「えっと……それって、あの嫌われ物ナンバー1の、台所生物？」

「はい。それが前世のあなたの力」

……

「はうっ……」

あたしの中から、何かが抜けた。

合気道と言う武道がある。詳しくは知らないけど、相手の力を利用して敵を倒すらしい。今のあたしは、「華麗なる美少女武闘家」という素晴らしい攻撃を返されてしまったゴキブリ。……よく分からない例えだけど、それだけショックを受けているということ……  
「大丈夫。素晴らしいことですよ」

姫宮さんが自信たっぷりな声で言った。

「ゴキブリの力により、頭と胴体が切り離されても、十二時間は生き続けられるのですっ!!」

「いやああああーっ!!」

その日、あたしははじめて失神というものを体験した。

## 仲間（同類）を探そう

夢を見た。

舞台は森の中。馬に乗っている女性と、その馬を引いている女性。姿は違うけど、なぜかその二人は、あたしと姫宮さんのように思えた。馬に乗っている女性が姫宮さんで、もう一人があたし。

馬から下りようとする彼女を、あたしは押しとどめようとしている。押し問答。レジの前で「私が払う」と譲り合いをしているおばさんみたい。

やがて、業を煮やした女性が馬から飛び降りる。その下にちょうどいた女性が押しつぶされる。そのやり取りで、大人しかった馬が勝手に走り去ってしまった。取り残された二人は、やがて取っ組み合いの喧嘩に……

そこで目が覚めた。

へんな夢。はっきり言って馬鹿馬鹿しいし、喧嘩しているんだから暗そうな夢なんだけど、なぜか暖かい不思議な感じ……

それはともかく。

ゴキブリの夢じゃなくて良かった……

あの衝撃の事実比べ、失神していたのはほんの数分だったらしい（なんか割に合わない？）。そのあとせっかく誘ってくれた姫宮さんには悪いけど、お泊りなんて気分になれず家に帰った。記念すべき高校生活はじめての土日の連休はただひたすら死んでいるだけの日々だった。

そして姫宮さんからの連絡もないまま、月曜日を迎えた。いきなり登校拒否するわけにもいかないのです、あたしは自転車で高校へ向った。ゴキブリなのに学校へ。

ゴキブリの学校？

「いやああああ！」

あたしは大声を上げて自転車で猛疾走。

はあ……はあ……はあ……

とにかく、落ち着こう。前世が何であろうと、今のあたしは、真正銘の人間だ。

しばらくして学校に着いた。自転車を駐輪場に置いて、下駄箱に向う。下駄履きに履き替えて教室へ　と思つたら、

「ねえ、今日は『あれ』やらないのお？」

後ろから声が掛かった。見ると、クラスメートの女の子が白い歯を見せて笑っていた。

えつと……確か、前田さんだっけ？

「あれって？」

「金曜日だっけ？　下駄箱を開けて手紙見た瞬間、ビリビリの100乗ぐらいに破つて落ちた破片を全て集めて丸めて姫宮さんの下駄箱の中に投げ込みその後わざわざ革靴に履き替えて彼女の下駄箱をげしげしとヤクザキック連発、のことだけだ」

……そ、そう言えば……そんなことをしたような……（汗）。

「あ、あれは、別に、毎日やるようなことじゃないけど……」

「そうなんだ。つまらないのお」

話ながら、二人で教室に向う。なんか、普通の友達みたい。

教室に着く。姫宮さんはちゃんと自分の席に一人座っていた。彼女はあたしに気づくなり席を立つて、こっちに向かってきた。

「あは。じゃあ、頑張つてねえ」

前田さんが去つてゆく。入れ替わりに姫宮さんがおっしゃった。

「ああ、今日もまた逢えましたね。さすが前世からの宿命なのです……はあ。」

聞こえるようにため息をついてやる。

やっぱり姫宮さんだ。あの日以来だけど、まったく変わらない。誘いを断つたことにほんの少しだけ罪悪感を抱いていたのが馬鹿みたいだ。けど、なぜだかよく分からないけど、自然と笑みが漏れた。それを見た姫宮さんもあたしにつられたのか、笑顔を見せた。イツ

ちゃってるやつじゃなく自然な微笑み。

あれ？ なんだろ、この暖かな気持ち

そのとき教室内に悲鳴が響き渡った。

「きゃあああっ！」

「ゴ、ゴキブリいいっ」

ゴキブリ？

あたしの身体がびくつと震えたのは、恐怖からではない。

硬直してしまっているあたしをよそに、教室は大騒乱。今まで大人しくしていた人が完全に地を出して叫んだり、教科書（新品）を丸めて、追いかけたり……。逆にクールっぽい人が、大声を出して逃げまわって……。そんな混乱の中、あたしは……

ゴキブリ……

「わああ……こつちに来るなあ！」

「じゃまつ。机を退かせ！」

……ゴキブリ。

べしっ！

「よしっ。殺った！」

「おおおお」

ゴキブリ……死んだ……

「……ひゆう。良かった、良かった。どしたの？ 黒羽ちゃん？」

前田さんの声。それを聞いて、あたしはやっと現世に戻ることができた。

「そっかあ、ゴキブリが怖かったんだねえ。うん、うん。分かるよお。何なんだろうね、あの物体。この世から消滅しろっ、って感じ？」

消滅……しろ？

「わっわっ、黒羽ちゃん、泣いてるの？ ご、ごめんね。変なこと思い出させちゃって。あんな生物、頭の片隅にも残したくないよねっ。ゴキブリゴキブリ、飛んでいけ〜」

彼女はあたしの頭を撫でて「痛い痛い……」をしてくれる。

ゴキブリ……飛んで行く……あたし……  
ついに、あたしは床に崩れ落ちて、号泣。  
この日、「変な人」と思われているあたしに、さらに「大のゴキブリ嫌い」という新たな称号が送られることとなった。  
ゴキブリなのに……

一時間目の授業が終わって休み時間。まだ死にかけているあたしのもとに、姫宮さんがやって来た。

「生きていますか？」

「……死んでいます」

死体のあたしはそう答えた。

「では、生き返らせて差し上げましょう。勘違いをされているようですが、あなたの前世はゴキブリではありません。一応人間です」  
はあ。ゴキブリではないですか……って、はいっ？

「じゃ、じゃあ、週末からずうっと悩んでいたのは、何だったのよっ」

ゴキブリ用殺虫剤を飲んで、死んでやろうかと、本気で悩んだのにつ。

「正確には『ゴキブリ人間』です」

やっぱ、自殺しよう。

あたしは泣いた。

「前世のひかりさんも私同様、人間です。ただ高貴なお姫様、かつこ私の護衛という立場であつたので、それに相応しい力を得るため、禁断の魔法実験を行なったのです」

「それって、ゴキブリとの合成、みたいなこと？」

他の人に聞かれないよう、小声で尋ねる。

「はい。姿形は変わりませんが、ゴキブリの力を得るのです。一例を挙げれば、素早いことでしょうか」

「……それってもしかして、あたしのDNAにゴキブリが混ざっているとか？」

富士樹海って、どうやって行けばいいのかしら？

「そのようなことはないでしょう。前世の記憶と力を受け継いでいるとはいえ、ひかりさんはご両親の血を受け継いだ真正正銘の人間です」

「そ、そうね。そうだよねっ」

人間っ。そう、あたしは人間よっ 万物の霊長っす！

生きた化石とか、人間が絶滅しても生き残るとか言われているけど、しよせんゴキブリ。皿洗い洗剤を浴びただけで死に絶える生き物なのよ。

「それはともかく……」

姫宮さんが、わずかに声の質を変化させる。

「敵の方も本格的に覚醒してきているようです。私の命も狙われています」

「……まじ？」

普通なら笑っちゃう所だけど、あたしは姫宮さんが真剣なことに気付いた。

「はい。朝校舎に入ろうとしたら、上からシャープペンシルが落ちてきました。参加賞でくれる百円ではなく、デパートとかで売っている高級なやつです。刺さったら、たぶん刺さります」

「で、でも、あたしの能力って、逃げ回るぐらいしか能がなくて、姫宮さんを守るなんて……」

「御安心ください。この世界に転生した護衛兼家来はひかりさん以外にもいるはずですよ」

「いるんだ」

確かに、お約束だよ。一番初めに目覚めた戦士が、他の仲間を探すってやつ。強い戦士を見つけだしたら、その人に護衛を任せて、あたしは左団扇 なんてこともできるかもしれない。

「まずはその人物を探すことが先決ですよ」

姫宮さんは、最後はお姫様のような威厳のある口調でしめた。

## 衝撃の真実ぱーと2

次の休み時間。あたしはトイレに行くついでに、その仲間とやらを探していた。

と言つても、どうやって探せばいいのかしら？

前世が何であつたにしろ、今は人間だもん。(断言っ！ あたしのこともあるので)。

とりあえず、適当な人に「ゴキブリ好きですか？」と聞いてみるのは……

って、変な人に思われるに決まつてる(クラス以外の人にも)。  
しかも好きつて言う人がいたら、それはそれで嫌よっ。

ならば作戦その2、姫宮さんを見習つて、アレの募集をする。

できるかあああ！ それにこれは、ある程度助けしてくれる人の目星が付いていないと無理っす。第一、あたしは姫じゃないし。

「よく考えたら、あたしの仲間の前世つて、ゴキブリじゃない可能性もあるのよね……」

考えが独り言で出る。これは話し相手の友達がいなかったせいで身に付いてしまった悪い癖だ。……そういえば、近頃はよく姫宮さんと喋っているなあ。のどが痛いもん、つつこみ過ぎで。今までこんなことなかったのに。

お約束で考えると、仲間はゴキブリ以外の方がありえそうだ。ただし、そこはかとなく共通点があるやつ。で、思いついたのは。

便所コオロギ？

いややああああ！

あたしは心の中で大絶叫。例え前世がそうだというだけでも、絶対に話したくないし会いたくもないっ。

「……って、あたしなんか、ゴキブリなんじゃない……」

前世で人を差別してはいけません、と心から誓った日でした。でもやっぱり便所コオロギじゃ嫌だから、別の物を想像しよう。

ナメクジ？ 毛虫？ ムカデ？ 蛾？

しくしく……何か、ろくなモノがない……。

ま、ゴキブリの仲間だもんねえ。これで仲間の方が格好良い虫だったら、あたしゃ脱退するぞ（でも格好良い虫って、何だろ？）。

それはともかく、どうやって仲間かどうか見分ければ良いんだろ。姫宮さんは、あたしが、その……あれだつて分かったみたいだけど。

うーん……例えば、それっぽい名前なんてありがちだね。

今まで気付かなかったけど「黒羽ひかり」なんて名前、いかにもアレだし。ってことは、便所コオロギだったら名字は「御手洗さん」もしくは「興侶さん」さん。下の名前は……うーん。  
ドンツ。

考え事をして下向きながら歩いていたら、誰かにぶつかってしまった。

「あ、す、すいませんっ」

見上げる。ぶつかった相手は男子生徒だった。切れ目の瞳で、背は男子としてはそれほど高くないけど、見た目すらっとした肢体をしていて、けっこう格好いい。雰囲気から言って、上級生かもしれない。

「こ、これって……お約束だと……」

思わず廊下でぶつかる男女。そして二人は恋に落ち

「……ゴキブリ」

男の人がぼつりと言った台詞に、あたしは硬直した。

はからずも抱かれる形になってしまい、あたしは離れようと体を動かす。あたしの跳ねた前髪が男の人の顔に触れる。その瞬間

「……猫？」

何かがピンと来た。あたしの口からそんな言葉が洩れる。

みつめ合う、男の人とあたし。そして二人は恋に落ちるのよ  
じゃなくてっ、

「あ、あの、もしかして前世って覚えてます？」

間違っていたら、電波びんびんな言葉。でも、あたしの予想は当たっていたみたいだ。

「そっか……じゃあ、君がゴキブリの」

うつつ……美形の男の人から、ゴキブリ呼ばわり……

それはともかく、分かったのだ。この人とは前に会ったような気がする。そして彼が猫と関係していたような……おぼろげな感覚だったけど、間違いじゃなかったみたい。

「俺の名前は、猫野珠人、二年生。ご想像の通り、前世で猫の力を持った戦士だよ。よろしく」

「あ、はい。あたしは黒羽ひかり……前世は……えっととにかくよろしくお願いします」

ああ、そんな言葉、女の子の口から言えないよお（女の子関係ないけど）。

「こちらこそ」

彼が笑う。きらーんと八重歯が光る。

職場恋愛。何ていう言葉があたりの中で浮かんだりする。

「ところで、君は『姫』を知っているのかな？」

「あ、姫宮さんのことですね。はい。同じクラスなんです。彼女に言われて、変な事実気付かされちゃったんだけど……」

「はは。良かったら、俺にも紹介してくれない？」

「はい。もちろんです。えっと……」

「それじゃ、放課後に、目立たないところがいいな。旧体育館裏で、いいかな？」

「は、はい」

にっこり手を振って、猫野先輩は去っていった。

うーん、いい人だねえ。しっかりしているし。逆にあたしの立場がないかもしれないけど、ない方が良くもね。それに、もしかしたら……むふふいやあん……なーんてね。

さてと、トイレに行こつーと。

教室に戻るなり、さっそく姫宮さんに新たな仲間のことを報告した。

「……猫、ですか。ゴキブリとは天と地の差ですね」  
ううっ……気にしていることを。

「しかし、『猫』の戦士がいたかどうか、記憶にありません。勘違いなのではないでしょうか。ゴキブリとあまり関係ありませんし」  
「ゴキブリはともかく、あたしだって仲間とかそういう記憶はないよ。でも確かに『猫』って感じはしたの。それに姫宮さんのことだって知っていたよ」

姫宮さんはなぜか乗り気でない。それがなんだか癪に障った。せつかく仲間を見つけて来たんだから、もつと喜んでくれたり、褒めてくれたっていいのに。なんか、働きを無視されたって感じ。って、すっかり姫宮さんの家来になっっているぞ……あたし。

別の意味で落ちこんでしまったあたしを見て勘違いしたのか、取り繕うように姫宮さんが言った。

「まあ、百聞は一見にしかず、ですね。一応会ってみましょう」

放課後。風物詩の新生部活動誘を潜り抜けながら、あたしと姫宮さんは、指定された旧体育館に向かった。入学式で使った新館があり、今は改築中の建物は、当然部活動での使用もなく、工事も休みでひっそりしていた。

人に聞かれたり、見られたくない話をするにはうつつつけの場所だ。さすが上級生。いいスポットを知っていますねえ。今度はプライベートで待ち合わせがしたいなあ……なんちゃって。

田舎なので校内の敷地は広い。体育館裏といってもテニスコートくらいの大きさがある。

猫野先輩がいた。学校を囲むフェンスに背中から寄りかかっていた。

あたしが手を振ると、彼も小さく手を振って応えた。

「……あの人がそうなのですか。てつきり女性だと思っていました。

猫ですし」

「まあイメージ的にはそうかもしれないけど。……じゃあゴキブリって、女の子？」

「それもそうですね……」

あたしの意見に姫宮さんも納得したみたい。それはともかく、姫宮さんは猫野先輩を見ても、びびっとは来ていないみたい。

あたしたちが近づくと、彼はフェンスから身体を離れた。

「よく来てくれたね。……そっちの娘が『姫』だね。ふっふっふ……確かにそうだ……」

なんか様子が変。お姫様を前にした家来の態度じゃないよね。

「なるほど……そういうことでしたか」

姫宮さんがあたしを庇うように、前に出る。えっ、えっ？ 一体なんなの？

猫野先輩がゆっくりと歩み寄ってくる。特徴の切れ長の瞳が、さらに細くなる。ちょっと怖い。

「……ひかりさん。彼は敵です。王宮に敵対する、反体制の戦士。ふふ。ですから『猫』みたいな、外道の力なのですね」

不敵に笑う姫宮さん。

「良くわかんないんだけど……ゴキブリよりはいいと思う　って、敵い？」

あたしがびっくりして叫ぶと、それに合わせて、彼はびしっとこちらを指さす。

「その通りっ！　につつき帝国の皇女め。貴様の前世での所業、領民から税金を搾り取って豪遊！　意味もなく企む世界征服！　無益な戦争を繰り返し！　人体実験！　数えきれない悪行の数々、断じて許しがたしっ！」

「……そんなことしてたの？」

「さ、さあ、全く記憶にございせんがぁ」

目を合わせようとしないうえ、声も上擦っている。なんか答弁している政治家の顔を思い浮かべてしまった。

「……………」  
あたしのお姫様のイメージって、「ああれええ」なんて叫んで「およよ」と泣く、刺客に怯えている可憐な少女。だったのに……………それが、やりたい放題やって、その拳句叛乱を起こされて命を狙われている皇女って……………しかも帝国。なんかイメージが悪いっ。

まあ現世の姫宮さんそっくり、って言ってしまうえばそれまでだけ。

「前世の記憶を取り戻して以来、ずっと貴様のことを探していた。そして今日、そっちのゴキブリ少女と出会った」

……………うつつ、その呼び方やめてほしい……………

「記憶の中で、君が皇女の家来だったってことは覚えていた。逆に、君の記憶はまだあいまいのようだったから、利用させてもらったんだ。なんとなく裏切ってくれそうな気がしたし」

「……………」

確かに、真相も聞いちゃったし、そうしようかなあ？　なんて思いつつふと気づく。

「あれ？　じゃあ、今朝シャーペン攻撃したのって、猫野先輩じゃないの？」

彼が姫宮さんを見つけたのは今さっきな訳だし。あたしの視線に気付いたのか、姫宮さんが言った。

「あれは狂言です。部下の士気を高めるための、心優しい心遣いです」

「こ、この人って……………」

あたしがじとーと彼女を見つめっていると、猫野先輩が「成敗してくれるっ」と叫んで、姫宮さんに飛びかかってきた！

## 友達じゃなくっても

あたしは反射的に、姫宮さんの前に出て、飛びかかってくる猫野先輩の腕を掴んだ。不意に力が加わったせいか、彼は大きくバランスを崩して、転倒した。

「くっ……やはり『姫』の味方をするのか」

彼は素早く体を起こして、あたしを睨みつける。猫が肉食動物であることを思い出す。その眼光に射すくめられ、正直、涙が出ちゃいそうなほど怖い。……でも、

「……確かに人遣い荒いし、前世ではなんか守ってあげる価値がないような人かもしれないけど、あたしは、姫宮さんを守る護衛だったっていうし、それに……」

友達だから、と言いかけて、あわてて口をつぐんだ。そんな恥ずかしい言葉、言えるわけじゃないじゃないっ。そもそも別に友達ってわけじゃないし。だいたい、あたしがどう思っただろうとも、相手の姫宮さんは、あたしのことを家来としてしかみていないもん。

「……ってとにかく！ 見て見ぬふりはできません」

「……仕方ないね。なら、俺も本気を出させてもらうよ」

先輩は、あたしたちから少し離れ、両足を広げて力を込める。次の瞬間、彼の身体に変化が起こった。

ぼんっ、と音を立てそうな勢いで、頭の上から耳が生えた。猫耳だ。ズボンの中で何かがうねうね動いているのは、尻尾だろうか。でも何か、アレみたいで、すごく嫌っ。

「わっ、へ、変身したよっ」

「外道の技術では変身するのですね。ひかりさんも変身するの方が良いですか？」

「絶対に、嫌っ！」

ゴキブリに変身するぐらいなら、眼の前の敵に殺されてやるっ！ あたしたちのそんなやり取りにも動じず、変身を終えた彼は悠然

と言った。

「ふふつ。これが真の俺の力！ にゃん」

今、なんか奇妙な音が聞こえたような……？

『……にゃん？』

姫宮さんとあたしの声が、綺麗にハモった。

「くっ、変身するところなるんだ。……別に、問題ない……にゃん」

やっぱり最後に「にゃん」。あたしと姫宮さんは向かい合って言葉を交わした。

「似合わないよね」

「はい。殿方が『にゃん』なんて言っても可愛くありません」

「うん。女の子でも、いちいち語尾に『にゃん』なんてつけていたら、うざりたいし」

「はい。ところで、ひかりさんがもし語尾につけるとしたら『ゴキ』ですか？」

「うつつ……それは嫌だなあ……」

「やかましい〜にゃんっ！」

やっぱり語尾に「にゃん」をつけて突進してくる。

速いっ！ 笑っている暇がないっ！

とつさに姫宮さんの腕を引っ張って、先輩の突進を交わさせる。

ぎりぎり、すぐ横を通りぬけた先輩は、すぐに止まって向き直る。

「あくまで邪魔をする気かにゃん。仕方ないにゃん。君からやつつけさせてもらうにゃん」

あああ、「にゃん」がやかましいいいい。

つつこみを入れたいのにな、そんな余裕もない。フラストレーションが溜まる。これが作戦なら、反帝国勢力侮り難しっ。

彼は右手を大きく振りかぶって、あたしに向ってくる。その右手の先には、小型のナイフのような大きな爪。あたしは紙一重でかわす。紙一重でないとかわせなかったのだ。

「ちっ、にゃん」

彼はすかさず方向転換して再び襲いかかってくる。

かわしてもかわしても、攻撃は続く。あたしは反復横飛びをひたすら繰り返して、彼の攻撃を避けているんだけど、避けるのに精一杯で、反撃なんてとても無理。

前に強姦（未遂）魔とやりあったときは、相手の動きがのんびりしていて、それをあたしが普通の動きでかわせば良かった。けれど、今回の彼の動きは、物凄く速い。だからあたしも全力で動き回らないといけない。自分でも信じられないようなスピードで右へ左へ。暴走するコーヒーカーップってこんな感じかもしれない（回してくれる人いないけどね）。

うつうつ……景色が回る……酔いそう。

彼は少し離れた所で、ようやく動きをとめた。

それに合わせて、あたしも止まって　ふらついた。ああ、世界が凄いいことになってるうう。

しかも、無理して動かしていた体を止めたとたん、一気に疲れが身体中を襲った。はつきり言って、立っているのが精一杯。

そこに彼が突っ込んで来た。交わし切れないっ。あたしの左肩と胸の中間に猫パンチがさく裂した。

痛みを感じたとたん、あたしの体は後ろに飛ばされて、背後のフェンスに背中から衝突した。

「んあっ」

息が詰る。痛いよ……。

背中に焼けるような激痛が走る。打ちつけた後頭部にも鈍い痛み。フェンスにぶつけた肘か肩は、血が出ているかもしれない。目から、涙が溢れ出てきた。

……どうして、漫画やアニメの主人公は、血が出ても平気で闘えるの？　こんなに痛いのに。もう、やだよ……。

「ひかりさんっ！」

彼女の声で、あたしははっと顔を上げる。急に視界が暗くなる。

彼が高く飛び上がって、あたしを狙っている。両手の鉤爪が鈍く光る。

あたしは必死で、地を這うようにして、彼の下を抜け攻撃をかわした。さつきまでいた位置と、入れ替わった状況になる。

「大丈夫ですか？」

近くにいる姫宮さんが、心配そうに尋ねてくれる。けど……

「……大丈夫じゃないよ」

姫宮さんを責めている訳じゃない。だけど、やっぱり無理だよ。

「しよせんあたしはゴキブリ。猫に勝てる訳ないもん……」

「いいえ。ゴキブリも猫も、あくまでその力を得ただけで、ひかりさんも彼も人間です。同じ人間なら何とかかなります」

「例え人間同士でも、男と女だよ。しかも上級生」

あたしの至極もつともなつつこみに、姫宮さんはしばらく沈黙して、

「……まあ、根性で何とかなるかと」

「なるかああ」

ああ……つつこみにも力が入らない。

「覚悟にやんっ！」

彼が爪を立てて突撃して来た。姫宮さんがあたしを押し退けて逃げようとする。あたしはバランスを崩してしまった。

……でもいいの。だって、あたしは家来なんだから……家来を踏み台にして悪事の限りを尽していたとしても。

それに、少しは感謝してたんだよ。

つて、違うっ！

姫宮さんは逃げたんじゃない。あたしを庇うように、彼の間立っているんだ。彼は惑ったようだけどそれも一瞬。その獰猛な瞳を光らせて姫宮さんに

「駄目えええっ！」

あたしは力を振りしぼって、姫宮さんに向かって、ラグビー部員も真つ青なタックルをかました。鋭い爪が姫宮さんの肌に触れる寸前、彼女を押し倒し、そのまま地面にダイブ。同じようにあたしも

ズサササーと、地を滑る。

「だ、大丈夫？」

「痛いです。ひかりさんのタックルが」

あたしが安否を尋ねると、姫宮さんはそんな言葉を返して来た。どこか擦りむいちゃったかもしれないけど、大丈夫だ。たぶん。

「……まったくもお、どうしてあんな無茶なことを……？」

「家来を守るのも、主君の義務ですから」

彼女は服に付いたほこりを払いながら、そっけなく何気に早口で言う。でも……

そんな義務なんてないよ、姫宮さん。

あれ？ 既視感。そうだ、今朝見た夢の続きだ。あれはたぶん前世の記憶。あの日、あたしと姫宮さんはお城から抜け出して、遠出の最中に馬に逃げられて、そんなところに刺客というより山賊が現れて、そのときもこうやって姫宮さんに庇われたんだ。

絶体絶命のピンチを、どうやって対処したのか。それは……

「はあ。君たちも無駄な抵抗をするにゃんねえ。そろそろ諦めたらどうにゃん？」

彼が悠然と歩みよってくる。勝利を確信するような燦々とした笑みを浮かべている。

けれど、その笑みを浮かべているのは、あたしも同じこと。ふふっ。

彼が怪訝なまなざしを見せる。それはそうでしょう。だってあたしたちの方が不利なはずなのに。

「……思い出したのよ。なぜあたしがゴキブリの力を持っているか。それは……魔法使いだっただから！」

彼が驚いたように足をとめた。

遠距離では絶大な力を誇る魔法使いも、接近戦は苦手。だからこそ、その距離をかせぐ素早さを得るため、ゴキブリの力を求めたのだ。

びしっと決めると、あたしは精神を集中させた。正直言うと、山

賊たちをやっつけた記憶がいまいち曖昧だったので不安だったけど、魔法使いというのは間違いないみたい。魔法が出来上がっていく。手ごたえを感じる。

あたしは『炎』を強くイメージする。詠唱も動作も必要ないことも分かってる。

彼とあたしの間、風が吹き荒れる。恐れをなしたのか、彼は突っ込んでこない。なぜか姫宮さんもあたしから遠ざかっているみたいけど。

イメージが頂点に達したとき、あたしは魔法を開放させた。

「プロミネンスフレアっ！」

風が強まる。ほこりや小石が風に吹かれて渦を巻く。初めは地面を転がっていた小石がやがて宙に浮く。どこかに落ちていた空き缶が風に捕まって、くるくる回りながらどんどん上昇したり……なんかすごい音がして、あたしの制服をバタバタなびかせて……

……あり？ 華麗な炎が舞うはずだったのに、これって何か……  
竜巻？

その答えが見つかる前に、あたしはその風に巻き込まれて 意識を失った。

前世なんて関係ない！

気づくと姫宮さんの顔があった。

「目が覚めたようですね。大丈夫ですか？」

「……………うん。ここは……………？」

「学校の保健室です。ひかりさんのおかげで初めて入ることができました」

あたしはベッドに寝かされていた。カーテンに仕切られた中に姫宮さんがいる。そっか、保健室かあ。入学してまだ数日。かくいうあたしも初めて……………って、ちょっと待ったあ。

「猫野先輩はっ？ 戦いはどうなったの」

がばつと身を起して気づいた。横になっていたときは視界に入っていなかっただけで、猫野先輩も、すぐそこに立っていたのだ。猫耳は、今は出ていない。でもなんでここに先輩がいるわけ？

「竜巻に巻き込まれたひかりさんを、突っ込んで助けたのが彼です。ここまで運んでくれたのも、同じくです」

「えっ？ どうして……………」

「目の前で飛ばされたのを見て、つい、な。君は別に標的じゃなかったから、殺す必要はなかったわけだし」

照れくさそうに頭をかく姿は、もうあの獰猛な先輩ではなかった。「そうだったんだ。その、ありがとうございます。でも、その姫宮さんとは……………」

あたしが標的じゃなかったとしても、姫宮さんはど真ん中なはずだけど。

「ふっ。それについては、私の華麗かつ論理的な説得によるところです」

「説得？」

「はい。ひかりさんを助けた彼が、私を改めて抹殺しようとしたとき、私はこう言ったのです。『前世はともかく、現代社会で人を殺

したら殺人罪で捕まりますよ』と」

確かに。

「いやああ。よく考えたらそうだなあって。何か間違っているよな  
って思っただけだ。というわけで俺は現世に生きるから、  
猫のことは忘れてくれ。じゃ」

彼は軽く手を振ると、保健室から出て行った。気のせいかな、足取  
りがスキップしているかのように軽い（猫みたい）。彼もいろいろ  
悩んだんだろうなあ。語尾に「にゃん」だもん。

「では私はひかりさんにジュースでも買って差し上げましょう」  
そう言っただけで、姫宮さんも出て行った。

しばらくして、入れ替わりに、保険医の先生が入ってきた。姫宮  
さんがあたしが目覚めたことを伝えてくれたのだろう。

先生の話によると、あたしは体育館裏の木の上にいた子猫を助け  
ようと木に登って、背中から落つこちて怪我をした、という設定に  
なっているみたい。なんか猫、てのがひっかかったけど、ゴキブリ  
を助けようと……じゃ無理がありすぎるよね（そういうキャラ設定  
はもつとやだ）。

あたしの怪我は大したことなく、ひと休みしたら帰っても大丈夫  
と言われた（ゴキブリ並みのしぶとさ、という言葉が浮かんで慌て  
て消した）。

先生が退出し、一人残されたあたしはそっと目を閉じた。

全く大変な日だった。下手すれば死んでいたんだから。でも不思  
議なことに、猫野先輩や姫宮さんを恨むつもりはなかった。まあ、  
竜巻はあたしが間違えて起したものだし。

遠くから微かに聞こえる部活動のかけ声。窓から入ったそよ風が  
カーテンを揺らす。

静かだなあ。なんか久しぶりに感じる。でもそれはうるさい日常  
があったから。ずっとこのままだと、また寂しい日々の繰り返し。

カーテンがさっと開いて姫宮さんが戻ってきた。片手に紙パック  
のりんごジュース（90円）を持って。

「はい。今回のご褒美です」

「……ありがとう」

あたしは下賜されたジュースを受け取った。ストローを刺して、ちびちび飲みながら、物思いにふける。

思えば昨日の今頃は、自分の正体（G）を知って、誰にも話せずただひたすら自室でどつぼにはまってたんだっけ。それが今は嘘のように、やり遂げたことによる、満足感。

やり遂げた？

そっか、それって、終わりも意味するんだ。

もう姫宮さんが敵に襲われることもない。よって姫宮さんに滅私奉公する必要もない。嬉しいはずなんだけど……なんかさびしい？

「どうしました？」

「いや、その、これでおしまいなんだよね？ 敵も説得して解決したわけだし」

「いいえ」

あたしが何となく躊躇して言った言葉を、姫宮さんはあっさりとして否定した。

「私の命を狙う敵はまだあります。よって、これからも仕えなさい」

……

「……先輩には前世の因縁なんかにこだわるとか言ってたなかった？」

「人を殺したら殺人になる、とだけです。仕えるのは欠片も罪ではないですし、前世は関係ありません」

この人って……

でも、前世なんて関係ない、って言うっちゃっていいのかなあ。だったら仕える理由もなくなっちゃうよ。

でもね。

あのとき、あたしを助けようとしてくれたのは姫宮さん。面白おかしい学園生活を提供してくれたのも姫宮さん。それはけっして、前世のお姫様ではないはず。

ま、いつか。もう少しだけ付き合ってみよう。いつか、友達と言える関係になるまで。

なんて、ね。

「……もし嫌でしたら、……としてでも」

「えっ？」

いつもはつきりものを言うのに、最後の部分だけ小さくて聞き取れなかった。

「なんでもないです。それより一つ言っておくことがあります」

「何？」

姫宮さんが口を開く。

「ひかりさんがゴキブリの力を身に付けた理由ですが。それは、魔法使いからだったというより、単に魔法が『ど下手』で、役に立たなかったからですよ」

衝撃の真実！ あたしはしばらく声がでなかったけれど、ぼつりと聞く。

「……ねえ。どうしてあたしみたいなのが仕官できたのかな？」

「コネかと」

「そだね」

前世なんてそんなものだよね。はあ。華麗なる魔法使い、さようなら。

でも、まいつか。前世なんて関係ないんだもんね。

前世なんて関係ない！（後書き）

ようやくかき終わりました。拙い話を読んただきありがとうございます。ごさいました。改めて読み直してみると、ご都合主義がちよっと多すぎでしたね。

ちなみにこの話を書き始めてから、自宅では奴らが大量発生してしまいました。おかげで（？）今では不意打ちでもないかぎり、顔色も変えずに退治できるようになりました（笑）。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5774h/>

---

ゴキブリ少女

2010年10月8日15時28分発行